校長室より

暗唱だより
令和６年１２月
第三吾嬬小学校長
川中子　登志雄

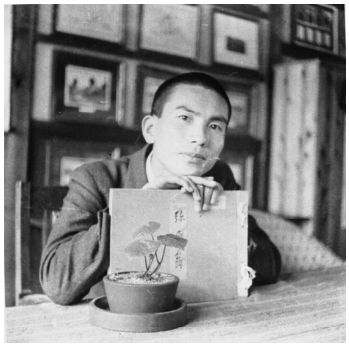
谷川俊太郎さん

地球温暖化の影響か、季節のうつりかわりがきょくたんになって、だんだんとうつりかわるのではなく、急に暑くなったり、寒くなったりするようになってきましたね。ここ十日ほどで、急に秋が深まり、朝晩とても寒い日が続いています。でも、これで「ふつう」ですね。１年の終わり、１２月、「師走」になったのですから。

１１月１３日に、詩人の谷川俊太郎さんが老衰のためお亡くなりになりました。９２歳だったそうです。これまで、「生きる」（令和２年度）「ことばあそびうた」（令和３年度）そして今年度４月の「春に」と、いくつもの詩を暗唱課題にしてきました。ことばを大切にして、優しいことばで大切なことをいろいろと教えてくれました。私は英語の先生でしたので、谷川さんが日本語に訳した「マザーグースの歌」なども紹介してきました。（「ハンプティ・ダンプティ」は皆さんにも紹介しましたね。）谷川さんが子どもの頃は、日本は戦争のまっただ中でした。学校も、軍隊式の教育が行われ、体罰なども日常的に行われていたそうです。谷川さんは、そんな学校や先生たちに嫌気がさして、学校をやめてしまいました。谷川さんの残したことばの中には、二度と戦争をしてはならないというメッセージもあります。ぜひ、谷川俊太郎さんの詩やことばを、読んでみてください。

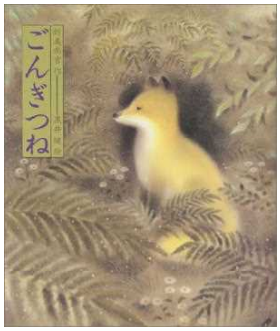
さて、今年最後の課題は…　皆さんもよくご存じの、『ごんぎつね』からです。

「ごんぎつね」（新美南吉）


新美南吉さん

小学校の国語の教科書にとりあげられて、日本中の人が知っている物語です。このお話を書いた新美南吉さんは、たくさんの心あたたまる物語を残してくれましたが、病気のため２９歳の若さで亡くなられています。

「ごんぎつね」の舞台は、新美さん自身のふるさとである愛知県知多郡半田町あたりだと言われています。いたずら狐のごんは、村の若者・兵十が病気のお母さんのために捕まえたうなぎを、逃がしてしまいます。少しすると、そのお母さんのお葬式の様子を見て、ごんはあんないたずらするんじゃなかったなと後悔します。せめてものつぐないに、ごんは兵十に栗や松茸などのおくりものをします。兵十が、不思議に思っていると、ある日自分の家に入るごんを見つけます。兵十は、お母さんにあげるうなぎをにがしてしまった、いたずら狐のごんを銃で撃ってしまいます。しかし、倒れたごんのかたわらにかためてある栗を見つけたとき、兵十はすべてを悟ります。



新美南吉さんはこのお話を１７歳の時に書いたと言われています。他にも、私も大好きなお話がたくさんあります。